

「エジプト映画の今」 相島葉月（国立民族学博物館准教授）

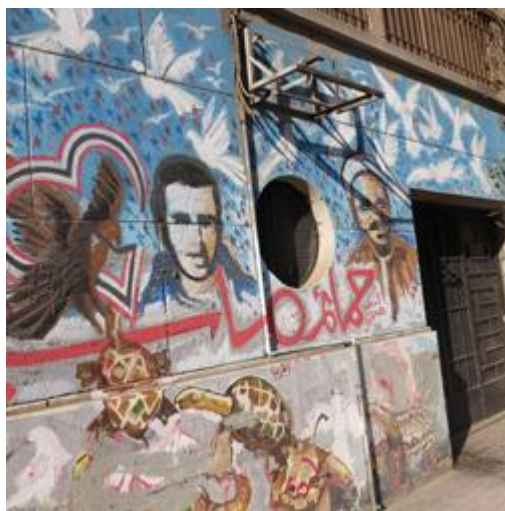
(1) 「もしもし、こちら猿」 2018 年 8 月 4 日刊行

中東では、エジプト映画の映像や音響技術の高さに定評がある。サスペンスやラブコメ、アクションといった幅広いジャンルの作品が数多く製作されていることから、首都カイロは「中東のハリウッド」と呼ばれている。本欄では、4 回にわたって、2017 年にエジプトで劇場公開された、おすすめ作品を紹介したい。

「もしもし、こちら猿（原題エル＝イルド・ビタカッラム）」は、スタイリッシュな映像と音楽に彩られたクライム・エンターテインメントである。マジシャン一家に生まれた兄弟が、警察に不当に連行され、行方不明となった父を救うため、国家権力に対して大ペテンを仕掛ける。2 人はサーカスを企画し、訪れた客を人質にとり、元内務大臣に父親の釈放を要求する。

弟役を大人気の 2 世俳優でラッパーのアフマド・エル＝フィッシャウィが演じていることから、緊迫したシーンも非常にコミカルである。黒幕であった元内務大臣を除く人質を解放し、特殊部隊 SAT に取り囲まれたサーカスから脱出するシーンは爽快な気分になる。

近年エジプトでは、反政府デモやテロ行為に関与したとして投獄され、行方不明になる者が後を絶たない。このマジシャンの父のように無傷で釈放されることは稀である。手品やペテンを使ってでも肉親を捜し出したい人は沢山いるに違いない。



反政府デモで命を落とした「殉教者」たちのグラフィティ＝エジプト・カイロで 2013 年 4 月、筆者撮影

2017年にエジプトで劇場公開された映画「テレビ説教師（原題マウラーナー）」は、12年に出版されたイブラヒム・イーサーのベストセラー小説を映画化した政治サスペンスである。宗教と政治の関係、シーア派やキリスト教徒への差別、イスラム過激派など、エジプトの社会問題を正面から扱った話題作だ。

宗教省に勤めるしがないイスラム学者であったハーテムは、イスラムの教義を解説するテレビ番組に出演したことをきっかけに、万人に慕われるスター説教師の座に上りつめる。人々は彼を「マウラーナー（我々の主）」と呼び、日常のあらゆることで助言を求める。

テレビ出演料を糧に豪邸を手に入れ、美しい妻と出会い、子宝にも恵まれる。しかし、幸せは長く続かず、ハーテムの人気や影響力を利用しようとする政治権力に翻弄されることになる。

本作の見どころは、実力派俳優アムル・サアドが演じている「スター」となった人間の戸惑いや葛藤である。イスラムに聖職者はいないが、エジプト映画はイスラム学者を「聖人君子」として描く傾向が強い。本作の主人公のハーテムは家庭問題に涙し、若い美女に誘惑され、腐敗した権力に怒るという、どこにでもいる普通の男なのである。



映画「テレビ説教師」の原作小説「マウラーナー」（第8刷）の表紙＝筆者撮影

(3) 誠のニッポン人 2018 年 8 月 25 日刊行

エジプト映画「誠のニッポン人（原題：ヤバーニー・アスリー）」は、エジプト映画の王道の、笑いあり、涙ありのコメディである。2017 年に本国で劇場公開された。

カイロの下町に暮らすマーヘルは、在エジプト日本大使館の日本語教室で出会ったサクラとめでたく結婚。双子の男の子に恵まれたものの、下町の暮らしになじめない日本人妻は子供を連れて帰国してしまう。子供に会いたいマーヘルは日本大使館を介してサクラと交渉し、半年だけという条件で息子たちはカイロに戻ってきた。

本作は随所でエジプト人が日本人に抱くステレオタイプな姿が見受けられる。しかし日本人は勤勉で科学に強いと言ったイメージは、エジプト人の自国民に対する批判的な眼差しの逆照射なのである。例えば 19 世紀以降、エジプトの社会問題といえば学校教育だ。私立校の学費を払えないマーヘルが公立小学校に息子を送ったことで、当初は「日本的」であった少年たちが「エジプト化」し、ベリーダンスを踊ったり、シンナーを吸ったりし始める。日本で育った子供の優秀さを称賛しつつ、エジプトの公立校を批判しているのである。

問題だらけのエジプトと真逆の日本。最後に子供たちが選ぶのはどちら？ぜひ見てほしい。



劇中に登場するナイル川＝エジプト・カイロで、2015 年 11 月、筆者撮影

(4) 若者 2 人とヤギの旅 2018 年 9 月 1 日刊行

エジプトは 29 歳以下が人口の 60% を占める若者の国である。彼らの悩みは就職と結婚。新進気鋭の映画監督シェリーフ・エル＝ベンダーリーは、2017 年に本国で公開された『ヤギのアリーとイブラヒム（原題アリー・マアザ・ワ・イブラーヒム）』を通して、非常を日常として生きるエジプトの若者の現実をビビットに描いている。

カイロの下町に暮らす、白く美しい子ヤギを「婚約者のナダ」と呼ぶアリーと、耳鳴りに悩む天才ミュージシャンのイブラヒム。この 2 人の青年は呪術師の診療所で出会い、「エジプトの三つの水域に小石を投げれば呪いが解ける」との助言に従い、カイロからアレキサンドリア、シナイ半島へと子ヤギを連れて旅に出る。

本作の魅力はオーディションで 300 頭の子ヤギの中から選ばれたナダの「メー（名）演技」である。彼女の自発的な動作を生かすために、監督はシーンごとにシナリオや俳優陣、カメラワークを適宜調整したという。エジプト映画の製作費は欧米や日本と比べてかなり小額であるため、CG の使用は最小限に抑え、国内各地でロケを行った。

本作でどこまでも広がる青い空と海をみたら、エジプトに旅立ちたくなる方も多いだろう。



映画「ヤギのアリーとイブラヒム」でアレキサンドリアを散策するアリー（左）とイブラヒム＝Loco Films 提供